

資料

## 高橋幸雄氏の愛媛県クモ図譜の補遺

鶴崎 展巨\*・小林 真吾\*\*

Supplements to Yoshio Takahashi's Illustrated Catalogue of Spiders in Ehime Prefecture

TSURUSAKI Nobuo and KOBAYASHI Shingo

**Abstract** : As supplements to Yoshio Takahashi's illustrated catalogue of spiders in Ehime Prefecture (Tsurusaki and Kobayashi, 2011, Bull. Ehime Pref. Sci. Mus., No. 16, pp. 1-32), we will report results of identification for several additional drawings newly available to us. The idea that "*Micarya takahashi* Kishida (nom. nud.)" corresponds to *Phrurolithus pennatus* Yaginuma, 1967 was corroborated by a line drawing in black and white newly found. Another shadowy spider, *Phauloctenus flavidus* Kishida (nom. nud.), was newly recognised to be *Takeoa nishimurai* (Yaginuma 1963) of Zoropsidae, which has not been recorded so far from Shikoku, including Ehime Prefecture.

**キーワード** : クモ目, 愛媛県, 高橋幸雄氏, クモ類図譜, ムロズミノレグモ

**Key words** : Araneae, Ehime Prefecture, Yoshio Takahashi, Illustrated catalogue, fauna, *Takeoa nishimurai*

著者らは前報(鶴崎・小林, 2011)で愛媛県総合科学博物館に保管されている故高橋幸雄氏(1901-1967)によるクモ類の図譜の全容を紹介したが, その後, 高橋幸雄氏のご自宅からさらに図数点が新たに見つかった。本報では, 前報の補遺として, それらの追加の図の内容について紹介する。また, 前報発行後, 前報では不明種としていたオハグロシボグモの正体や同定に修正を要する種などについて, 日本蜘蛛学会の会員諸氏から貴重なご示唆をいただいたので, それらについてもふれる。

### 追加される図譜の概要

今回追加されたスケッチは, 前回と同じA5判サイズ(14 cm × 19 cm)のケント紙に描かれた彩色画(ただし, 前回のように植物標本台紙には貼られていない)が7枚と, ほぼA4判サイズ(14 cm × 19 cm)に丸ペンと黒の製図用インク(または墨汁)で描かれたモノクロの図が7枚である。番号は付されていなかったが, 整理の都合で, それぞれ補遺 Supplement をあわらす S (A4判のものには Supplements, Large size をあわらす SL) と通し番号(1~7)を, ある程度分類順を考慮しながら付した。これらの図はすべて, 愛媛県総合科学博物館に保管され

ている。これらの内訳を同定結果とともに以下に記す。各種の記述の先頭には, 採集日と採集地を記した。「」内は図に付されている記述である。

#### 1. ヒシガタグモ(ヒメグモ科)(図1A, S-1)

1938年10月16日, 松山市福角。種名は記されていないが, 図から *Episinus affinis* Bösenberg & Strand, 1906 ヒシガタグモの幼体と考えられる。前報の高橋図譜にも面河産の個体の図(キララグモという名称で)が1枚含まれていた。図の右下に次の書き込みがある:「昭和13年10月16日福角山にて捕る。草の中の柴の上を徘徊せるものなり。腹部の背の後方に近きところに左右に突起せるものあり。眼域は特別に高くもりあがりて, 2列に明らかに並ぶ。後列中眼最も大なり」

#### 2. ヒザブトヒメグモ(ヒメグモ科)(図1B, S-2)

1938年9月, 松山市福角。 *Parasteatoda ferrumequina* (Bösenberg & Strand, 1906) ヒザブトヒメグモの雌である。図の左上に実物大図, 左上に住居の側面図がある。右下に「昭和13年9月福角山にて捕る。崖崩れのした雨露のあたぬ所に円錐形の鐘をつり下げたる如く土粒を綴りて巣をつくる」という記述がある。愛媛県では

\* 鳥取大学地域学部生物学研究室 (〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101, E-mail: ntsuru@rstu.jp)

\*\* 愛媛県総合科学博物館学芸課自然研究科

\* Laboratory of Biology, Faculty of Regional Sciences, Tottori University, Tottori, 680-8551 Japan. E-mail: ntsuru@rstu.jp

\*\* Curatorial Division, Ehime Prefectural Science Museum, Niihama, 792-0060 Japan. E-mail: kobayashi-shingo@pref.ehime.jp

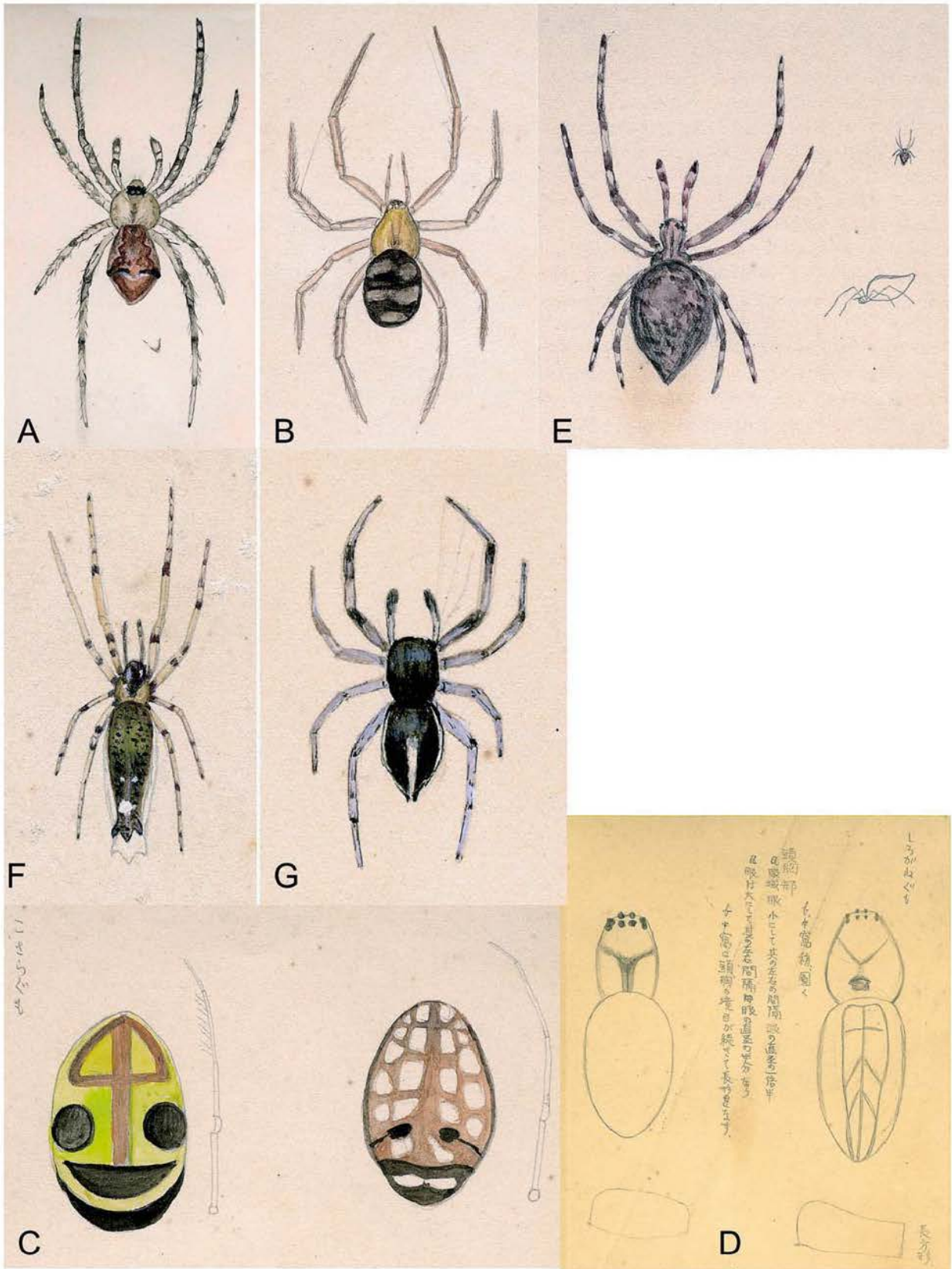


図1. 高橋幸雄氏クモ図譜(追加分 A5サイズ). A: ヒシガタグモ幼体(ヒメグモ科, S-1). B: ヒザブトヒメグモ(ヒメグモ科, S-2). C: アシナガサラグモ(サラグモ科) (左) とチビシロカネグモ? (アシナガグモ科) (S-3) (右). D: 科不明種 (S-4). E: 科不明種 (左) とシロカネグモ属の1種(アシナガグモ科) (右) (S-5). F: ヤマゴミグモ(コガネグモ科) (S-6). G: キアシハエトリ(ハエトリグモ科) (S-7)

Fig. 1. Drawings made by Yoshio Takahashi (Supplements). A: *Episinus affinis* Bösenberg & Strand, 1906 (Theridiidae). B: *Parasteatoda ferrumequina* (Bösenberg & Strand, 1906). C: *Neriene longipedella* (Bösenberg & Strand, 1906) (Linyphiidae, Left) and *Leucauge crucinota* (Bösenberg & Strand, 1906 ?) (Tetragnathidae) (S-3). D: Family unknown (S-4). E: Family unidentified (Left) and *Leucauge* sp. (Theridiidae) (S-5). F: *Cyclosa monticola* Bösenberg & Strand, 1906 (Araneidae). (S-6). G: *Phintella bifurcilinea* (Bösenberg & Strand, 1906) (S-7) (Salticidae).

平地の丘陵から山地まで山道沿いの崖地などに普通の種であるが(鶴崎ら, 2011), 前報の高橋図譜(鶴崎・小林, 2011)には含まれていなかった。

3. アシナガサラグモ(サラグモ科)(左)とチビシロカネグモ?(アシナガグモ科)(右)(図1C, S-3)

両種ともに腹部背面(彩色)と歩脚と腹部の側面図のみが描かれている。腹部の側面図(図1Cでは省略)には、側面観でのそれぞれの特徴が箇条書きされているが、標本の採集地や日付は記されていない。

左図の左上には「コサラグモ」と鉛筆書きされているが、腹部の斑紋からアシナガサラグモ, *Neriene longipedella* (Bösenberg & Strand, 1906)と判断される。本種は普通種で前報(鶴崎・小林, 2011)にも掲載されている。また、右図はシロカネグモ属(アシナガグモ科)が外部からの刺激により銀白色部分が収縮して断片化した状態の典型的な腹部の斑紋を示しており、もしこれが成体であれば最有力候補はチビシロカネグモ *Leucauge crucinota* (Bösenberg & Strand, 1906) かもしれない。ただし、本種は愛媛県では未記録で(鶴崎ら, 2011, 四国の他の3県では既記録: 新海ら, 2010), 幼体であれば他種の可能性もあるので、種までの同定は保留する。

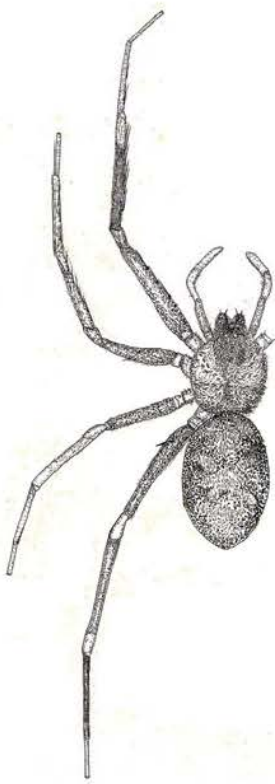


図2. ヤバネウラシマグモ (= タカハシツヤグモ) (フクログモ科) (SL-1).  
Fig. 2. *Phrurolithus pennatus* Yaginuma, 1967 (Clubionidae) (SL-1).

4. 科不明種(図1E, S-4)

1938年9月, 松山市福角町。右下に「昭和13年9月福角山にて捕る。灌木の上に糸を引ける所を捕らえしものなり」という記述がある。雌と思われる。科はヒメグモ科, コガネグモ科などが候補であるが, 該当種不明。頭胸部がかなりくびれているが, このようなくびれをもつクモは少なくとも国内産の種にはなく, おそらくデフォルメのしすぎであろう。

5. 科不明種(左)とシロカネグモ属の1種(アシナガグモ科)(右)(図1D, S-5)

図1Dの左図は科不明種。右図は右上に「シロカネグモ」と記入があり腹部斑紋も典型的なシロカネグモ属(*Leucauge* sp.) (アシナガグモ科)であるが, 種までは特定できない。頭胸部の特徴についてメモがあるが, 採集日付や場所については記入がない。

6. ヤマゴミグモ(コガネグモ科)(図1F, S-6)

1939年8月福角山。図から *Cyclosa monticola* Bösenberg & Strand, 1906 ヤマゴミグモと判断した。前報の高橋図譜には本種は含まれていないが, 愛媛県では既記録(鶴崎ら, 2011)。「昭和14年8月堀江村福角山山中にて捕る。ゴミグモと同じ形の巣をはり, ごみ状のものを中央にかける。頭部と胸部の色彩異なる。頭は小豆色の濃きもの, 胸は黄褐色。眼式は直眼は中央に相接してあり, 第1間眼は前方の突き出たる左右にある。第2, 第3間眼は直眼と同じ線上にありてやや八字状に接して並ぶ」。

7. キアシハエトリ(ハエトリグモ科)(図1G, S-7)

1939年9月30日。松山市重信川出合い(メモには「茂信川出合い」と書かれている)。キアシハエトリ *Phintella bifurcilinea* (Bösenberg & Strand, 1906)の幼体。本種は前報の高橋図譜でも既記録(鶴崎・小林, 2011)。「昭和14年9月30日茂信川の出合いにて捕る。石の下側に小粒の石を数個合わせて此の中に白き袋を作りて棲む。第1脚, 第4脚を比するに第1脚やや太し, 体は黒毛の軟きものに覆われる。腹部背の中央より尻端に白色縦線あるいは十文字形の模様あり。また腹側に白色の線あり。歩脚は黄褐色の地肌に白毛あり。触手の先端黒し」。

8. ヤバネウラシマグモ(フクログモ科)(図2, SL-1)

この図(ほぼA4サイズの紙に白黒で墨入れされており, 実際は背景がもう少し汚れているが, Photoshopで背景を明るくし, コントラストをつけて汚れを除去してある)には種名も採集データも記されていない。しかし, 体全体のプロポーションや腹部の白い斑紋, 第1歩脚脛節末端側や第4脚膝節や脛節端部に白斑が存在すること, ならびに第1歩脚脛節と第2歩脚脛節下面に対

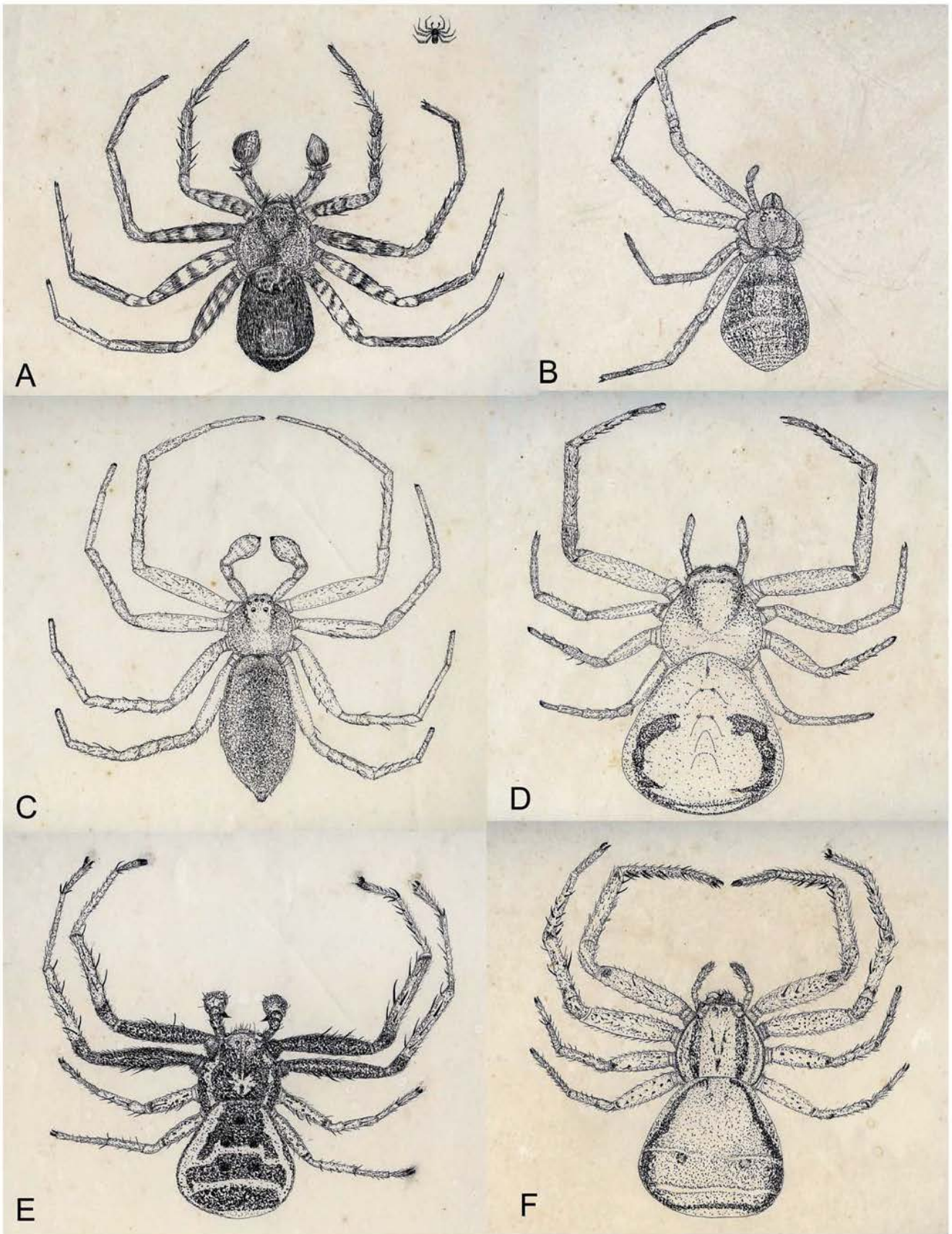


図3. エビグモ科(A-C)とカニグモ科(D-F)のモノクロ図. A: キハダエビグモ雄(SL-2). B: キハダエビグモ雌(SL-3). C: エビグモ属の1種の雄の幼体(SL-4). D: ハナグモ(SL-5). E: カニグモ属の1種, 雄(SL-6). F: カニグモ属の1種, 雌(SL-7).  
 Fig. 3. Drawings of spiders of Philodromidae (A-C) and Thomisidae (D-F) in black and white. A: *Philodromus spinitarsis* Simon, 1895, male (SL-2). B: *Philodromus spinitarsis* Simon, 1895, female (SL-3). C: *Philodromus* sp., juvenile (SL-4). D: *Ebrechtella tricuspadata* (Fabricius, 1775), female. E: *Xysticus* sp., male. F: *Xysticus* sp., female).

## 前報への補遺

をなして存在する棘列の片側が描かれていることなど、前報で、「タカハシツヤグモ "*Micarya takahashi* Kishida (nom. nud.)」に相当すると推定したヤバネウラシマグモ *Phrurolithus pennatus* Yaginuma, 1967 (八木沼, 1967) の特徴がよく出ており、本種と判断した。高橋氏が自分の名前を冠したこのクモについてとくに細密な描画を残されたものと思われる。雌である。

## 9. キハダエビグモ雄 (エビグモ科) (図 3A, SL-2)

図 3A-F に掲載した 6 個体はそれぞれ図 2 と同じく、ほぼ A4 サイズ (28.5 cm × 38 cm) のケント紙に墨入れされたモノクロ図である。残念ながら、図 3 の 6 個体のいずれにも採集データや種名は付記されていない。

この図 (図 3A) は、斑紋パターンからキハダエビグモ *Philodromus spinatarsis* Simon, 1895 (エビグモ科) の雄と思われる。

## 10. キハダエビグモの雌 (エビグモ科) (エビグモ科) (図 3B, SL-3)

前種、キハダエビグモ *Philodromus spinatarsis* Simon, 1895 の雌と思われる。

## 11. エビグモ属の 1 種の雄の幼体 (エビグモ科) 幼体 (図 3C, SL-4)

触肢は雄の幼体であることを示している。エビグモ属 *Philodromus* であることはわかるが、それ以上はわからない。

## 12. ハナグモ (カニグモ科) の雌 (図 3D, SL-5)

腹部の斑紋があまり典型的ではないが、ハナグモ *Ebrechtella tricuspidata* (Fabricius, 1775) の雌と考えられる。似た種にコハナグモ *Diaea subdola* O. P.-Cambridge, 1885 があるが、この図の腹部の形はハナグモにより近く、また、この図のような蹄形状に斑紋がつながる色斑型はコハナグモの本土の集団ではまず出ないとのこと教示を谷川明男氏よりいただいた。

## 13. カニグモ属の 1 種の雄 (カニグモ科) (図 3E, SL-6)

雄の成体でカニグモ属 *Xysticus* であることはわかるが、本属のクモは外見が互いによく似ており雄では触肢、雌では外雌器 (雌の外部生殖器) の図がないと、種名は決定できない。

## 14. カニグモ属の 1 種の雌 (カニグモ科) 図 3F, SL-7)

カニグモ属 *Xysticus* の雌であるが、種名は決定できない。

1. 「オハグロシボグモ *Phauloctenus flavidus* Kishida nom. nud.] の正体

「オハグロシボグモ」は、前報 (鶴崎・小林, 2011) において、高橋図譜のスケッチに付されている種名で岸田久吉が名称のみを与え正体ははっきりしない (または、していなかった) クモとして取り上げた数種のうちの 1 種である。昨年 (2011 年) の 8 月に鳥取大学 (鳥取市) で日本蜘蛛学会第 43 回大会が開催されたおりに、加村隆英・荒川 真の両氏から前報 (鶴崎・小林, 2011 の p. 4) の「オハグロシボグモ」はムロズミソレグモ *Takeoa nishimurai* (Yaginuma, 1963) (スオウグモ科) ではないかとのこと教示をいただいた。荒川さんが奈良市の自宅で採集したムロズミソレグモ (詳細は荒川, 2011 を参照) の外観や色彩が鶴崎・小林 (2011) に掲載の図 (図 3C) によく似ているとのことであった。その折り、荒川さんがデジタルカメラで撮影されたムロズミソレグモの個体の写真も見せていただいたが、たしかによく似ており、かつ、前方から撮影された写真では鉗角 (= 上顎) が黒いという特徴 (和名の「オハグロ」は、おそらくこの特徴を捉えたものと思われる) もよく現れていた。小林図譜のスケッチから算出した体長は約 11 mm であるが、八木沼による本種の原記載 (八木沼, 1963) での体長も雌で 10.8 mm である。

八木沼 (1963) による本種の記載文には和文および英文のいずれにおいても色彩について次のような記述がある: 「全体やや赤味を帯びた黄褐色、頭胸部は中央と側縁の間に黒色の不規則な 2 縦条があり、一見シボグモの如き感がある。全体に白毛密生し眼付近のものは長い。上顎下顎は黒褐色」: 「Carapace with black markings resembling the pattern of Ctenidae, covered with white hairs. Chelicerae and labium blackish brown」。和文では下唇 (labium) が、英文では下顎 (maxillae) が抜けているが、原記載に掲載されている下唇と下顎の図 (fig. 6 in Plate III) から判断すると、おそらくどちらも黒褐色と思われる。

以上から、高橋図譜の「オハグロシボグモ」は加村・荒川の両氏のご指摘のとおり、ムロズミソレグモであったと考えられる。「オハグロシボグモ」の名称は、八木沼 (1988, p. 17, 図 1) に掲載されている岸田久吉氏の遺稿原図中にも京都府産として図つきで出ているが、この図の斑紋パターンも Namkung (2001, pp. 405-406) や荒川 (2011) にあるムロズミソレグモの生態写真のそれに非常によく似ており、この図もムロズミソレグモと考えて矛盾がない。ムロズミソレグモは、これまでに本州の 6 府県 (山口, 鳥根, 鳥取, 大阪, 京都, 愛知) (新海ら, 2010) と韓国および中国から記録があるが (Platnick,

2012), 採集例の少ないクモである。愛媛県を含む四国では未記録であった。

八木沼 (1963) によるムロズミソレグモの原記載にある「鋏角 (= 上顎) と下顎, および下唇が黒褐色」という記述は, 残念ながら, その後の図鑑類 (八木沼, 1968, 1985; 小野, 2009) では抜け落ちているが, 本種のわかりやすい識別形質として, (1) シボグモに似ている, (2) 飾板がある, に加えて, (3) 鋏角 (= 上顎) + 下顎 + 下唇が黒褐色, という第3のポイントは落とさないほうがよいのではないかと思われる。飾板の存在などは, 体長 10 mm ほどのクモでは野外で拡大鏡なしでは確認しづらいからである。ただし, 本種の鋏角は上方からは見えない。

## 2. 前報の種名の修正

(1) ヘリジロオニグモ (誤) → マルヅメオニグモ (正)  
前報 (鶴崎・小林, 2011) にヘリジロオニグモ *Neoscona subpullata* (Bösenberg & Strand, 1906) とある図 (p. 15, 図 7 I) はマルヅメオニグモ *Araneus semilunaris* (Karsch, 1879) ではないかのご指摘を初芝伸吾, 新海明の両氏からいただいた。愛媛県で普通種のヘリジロオニグモもこれに似た斑紋パターンを示すことがあるので, 前報ではこの種と考えたものであるが, どちらかというところ後に後者によりよく似ていおり, また, マルヅメオニグモも愛媛県では記録させているので, 本種に訂正する。

(2) ザトウムシ 2 種の図 (前報の図 12 A と B) の入れ替え

前報でザトウムシの図 3 枚を掲載した図 12 のうち, 図 12A にオオナガザトウムシとして出ている図 (歩脚長のより長い個体の図) が実際にはヒコナミザトウムシ, 図 12B にヒコナミザトウムシとして出ている図は実際にはオオナガザトウムシである。図の入れ替えをお願いしたい (校正ミスである)。

## 謝 辞

今回, 追加で見つかった貴重な図をご提供いただいた

高橋幸雄氏のご息の高橋泰明氏に厚く御礼申し上げます。また, 谷川明男 (東京大学), 加村隆英 (追手門学院大学), 荒川 真 (大阪大学), 初芝伸吾, 新海 明の各氏からは, 図からの種の同定に関して専門的な立場から貴重なご教示をいただいた。ここに記して御礼申し上げます。

## 文 献

- 荒川 真 (2011) 奈良県産のムロズミソレグモとマダラヒメグモ. くものいと, No. 45. pp. 14-17.
- Namkung, J. (2001) The Spiders of Korea. Kyo-Hak Publishing, Seoul, 647pp. (In Korean)
- 小野展嗣 (2011) スオウグモ科ムロズミソレグモ. p. 141. In: 小野展嗣 (編) 日本産クモ類. 東海大学出版会 (東京)
- Platnick, N. I. (2012) The World Spider Catalog, Version 12.5. <http://research.amnh.org/iz/spiders/catalog/INTRO1.html>
- 新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 (2010) CD 日本のクモ ver. 2010.
- 鶴崎展巨・小林真吾 (2011) 愛媛県総合科学博物館に保管されている高橋幸雄氏のクモ図譜. 愛媛県総合科学博物館研究報告, No. 16, pp. 1-36.
- 鶴崎展巨・石川春子・井原 庸 (2011) 愛媛県のクモ類, 愛媛県総合科学博物館研究報告, No. 16, pp. 37-63.
- 八木沼健夫 (1967) 日本産真正クモ類の検討・追加ならびに 7 新種の記載. 追手門学院大学文学部紀要, No. 1. pp. 87-107.
- 八木沼健夫 (1968) 原色日本蜘蛛類大図鑑. 増補改訂版. 保育社 (大阪市) 197 pp.
- 八木沼健夫 (1986) 原色日本クモ類図鑑. 保育社 (大阪市) 305 pp.
- 八木沼健夫 (1988) 黎明期の日本のクモ学③日本のクモ学を育てた出版物. 日本の生物, 2 (2): 17-20.